

---

# 最愛のキルト

コオロギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最愛のキルト

### 【Nコード】

N9066X

### 【作者名】

コオロギ

### 【あらすじ】

ある日から突然、最愛の熊のぬいぐるみが動き出した。

驚きを隠せない幸高<sup>こうたか</sup> 宙人<sup>ちゆうじん</sup>だったがそこへある男から一本の電話が入る。

「そのキルト（ぬいぐるみ）で願い事を一つ叶えてみませんか？」  
宙人は戦いへと巻き込まれていく、最愛のキルトと共に……。

FC2小説にも掲載しています。

## 大事なもの

「ねえ・・・ヒロト起きないの？もう学校の時間だよ？」  
モーニングコールで幸高（こうたか） 宙人（ひろと）は爽やかな朝を迎える。

「・・・ん？」

ただし、ものすごい勢いで寒気を覚えた。

なにせ、この部屋、この家には自分以外存在しないためである。  
宙人の両親は海外出張のため長期で外出している。  
ましてや朝にわざわざ起こしに来るチャージミングな幼馴染もない。  
ということは誰か？ということまで寒気を感じまくっている次第だ。

「聞いているのかいヒロト！！おきろーっ！！」

俺は声の主に背を向けられないように上体を起こす。

「誰だあ！怖くなんかないぞ！出てこい！」

恐らく幽霊か何かの類か？それとも幻覚？

どっちだろうとその方向に大声で叫べばなんとかかなると思っている。

誰もいない。

おかしい、たしかに聞こえていた方向に向いたはずだ。

くまなく探してみるが・・・人影はない。

向いた方向にあるのは勉強机とぬいぐるみのウィリーである。

実は小さい頃から可愛いものに目がない幸高 宙人は高校生になっても可愛いもの離れできずに延々と愛でている。

その縫いぐるみのウィリーは8才のころ母に買ってもらった一番の宝物だ。

背丈は6cm強のミニサイズ、小さくて可愛い白熊。

そのどこでも手軽に連れていけるサイズにも惹かれた。

「やっと、起きたねヒロト！支度しちやいなよ！」

その縫いぐるみがしゃべっていた……。

「えっと……ウィリーさんですか？」

と冗談混じりながらも白熊の縫いぐるみに質問を投げかけてみる。

「はい、ウィリーです」

しゃべるウィリーもまた可愛い。

違う違う、そうじゃない。状況を確認するんだ……。

なぜ、縫いぐるみが喋っている？

現在であればそう言ったグッズもあるが、ウィリーは7年前から可愛がっているフツの縫いぐるみだ

それとも何かが取り憑いた？にしてもウィリーですか？という問いかけに「はい」と答えるだろうか？

わからない……。

「ヒロト、時間がないんだけど……大丈夫？」

冷静になつて時計を見る。

「あぁーっ！間に合わねえ……！」

死ぬほど急いで支度を始める。その傍らでウィリーの声が聞こえる

がとりあえず幻聴と判断し先を急ぐ。

かろうじて遅刻せずに学校へ到着した。しかしあの朝の出来事はなんだったのであろうか……。

「まあ、疲れてるって事で……」

そこへ幼馴染の當地ちじみ 由樹ゆき が話しかけてきた。

「宙人くん、おはよう……今日遅かったね」

彼女は非常に内気だ。今の今まで仲良くやれたのも俺の可愛い物好きが幸いしてのことである。

見た目は地味だが可愛い方なのでは？と常日頃思っている。

「おはよう由樹、それがさあ朝変な夢を見たんだよ！」

朝の縫いぐるみが喋った事を話そうとした時、教師が教室に入ってきた。

「おらゝ席に付けゝ！ホームルーム始めるぞ！」

「宙人くん、ごめんね……後で聞くから……」

由樹はそそくさと自分の席へ戻った。

そんな申し訳なさそうに言わなくてもいいのに……と思いながら黒板に目をやる。

教師がテストが近いからどうのこうの言っている。

俺はそこまで成績は悪い方ではないので静かに聞き入っていた。

「ヒロトっ！ヒーローっっ！」

なんか俺の鞆から聞き覚えのある声がする。

恐る恐る鞆に目をやってみると……そこにいた、「ウイリー」が。

机に掛かっている俺の鞆の口から両手を出してこっちを見ている。

ここまで来ると普通なら怖い。B級のホラー映画になりそうなくらい怖い。

しかし幸高 宙人には可愛く見えてしょうがない。この光景を写真で取りたいくらいだ。

いやいや、違う違う。ここは学校だ、取り敢えず騒ぎになるとヤバイ。

いそいでワイリーを押し込んで鞆を閉めた。

しかし、逆に鞆の中で騒いでいる。まずい、周りの生徒が気づかないか？

「ねえ、誰かケータイなってない？」

「マジで！？先生に見つかったらやべーぞ！」

予想通りだ、このままではいろんな意味でピンチだ。

と・・・ここで教室内でのピンチを切り抜ける最強の方法を思いついた。

「先生！具合が悪いので保健室行つてきます！！！」

ワンパターンだ。でもこれぐらいしか思いつかない。

「幸高、珍しいなお前が体調不良とは・・・まあお前は嘘をつかんか。誰か付けようか？」

さすが毎日真面目に授業を受けてただけあるぜ、俺！

「先生、とりあえず一人で行けます」

そう言い残し保健室へ向かう振りをして速やかに空き教室へ入る。

宙人は空き教室に入るなり鞆を開けた。その瞬間、鞆から何かが飛び出す。

「ぶはーっ！ひどいじゃないか！閉じ込めるなんて！」  
どこからどう見てもウィリーが喋っている、もう現実逃避は不可能だ。

ここはもう腰を据えて話し合うしかない。

「なあ、なんでお前さん、喋ったり動いたりできるんだ？」  
宙人は当然の質問を試してみる。

「なんでだろ・・・？わかんないや。今朝からなんだ、言葉を話せたり動けたりするの」  
彼の言い方だと今まで意思があつたかのように聞こえる。

「もしかして・・・今まで意思は持ってたのか？」

「うん、あれだけ大事にされればありがとうを伝えたいって思うよ  
うになるよ！」

バカだ俺は。昔から思っていたはずなのに。ウィリーが動いたら・・・。喋ったら・・・。  
すごく嬉しいな、なんてずっと思っていたのに。  
そしてウィリーはありがとうを伝えたくて意思を持っていたのに。

動いたことに驚いて現実逃避してたなんて・・・最低だ。

「ごめんなあ・・・気づいてやれなくて・・・お前がしゃべったっていうのに返事もろくにしなかつたよな・・・。」

「驚くのは当然だよ、でもなんとかありがとうだけは伝えたかったからさ！」

「今までそばに置いてくれてくれてありがとう！」

とても嬉しそうに言ってくれた。

返す言葉がない……。

だから俺はそんなウイリーの数センチ程しかない頭を撫でてやった。目に涙を浮かばせながら。

いきなり甲高い音が教室内を響かせる。

携帯の着信音だ。何故かタイミングを見計らったかのように……。

見たことがない番号だ。こういったものには出ることは無いのだが……違和感を感じ出ることにした。

「もしもし？」

恐る恐る相手を伺う。

「こちらは幸高 宙人様のお電話でしょうか？」

丁寧な口調だが、何か引つ掛かる言い回しだ。

「あんた誰だ？」

「私はそうですね……ニューとでも名乗っておきましょう。幸高様、あなたは選ばれました」

そのニューと名乗る男は楽しそうに語る。

「キルト（最愛の縫いぐるみ）たちを戦わせる人々『マスター』に  
ね」

## 大事なもの（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

つづけて連載していきますので、アドバイス等あったら気軽に願  
いします。

## かわいい戦士達

ある男からの一本の電話。内容はぬいぐるみを戦わせないかという馬鹿げた質問だった。

「ふざけんな、絶対そんな事させねーよ」

少タイラつき始めていた。唐突に変な質問をしてきたかと思えば戦うとはどういうことだ？

「では、言い方を変えましょう。貴方の他にこの日本に『マスター』が何百人もいるとしたら？」

「だったら、どうなるって言うんだ」

「・・・では簡単なルール説明といきましょう」

電話の奥でほくそ笑んでいるのがわかる。明らかにペースをもってかかれていた。

「各地に存在するマスターとそのキルトを倒すことにキルポイントというのが入ります。そのポイントが100ポイント貯まれば願いを一つ叶えてさしあげます」

「つまり戦わなくてもマスターとしての知識のない貴方は格好の的というわけですね」

なるほど・・・逃げ道はどっちにしろ無いということか。それこそふざけてやがる。

「自身を守るには力をつけろと?」

「そのとおり。それに貴方のキルト、結構変りものみたいですね。ここはサポーターをつけましょう」「ニューと言う男は淡々と話を進める。

「サポーター?」

「ええ、近いうちにこちらの組織の者を向かわせるので、それまでに負けたりしないでくださいね?」

話がどんどん進んでいる。第一、どうやって戦うんだ?俺にとってはぬいぐるみは可愛いイメージしかない。「イマイチ、イメージがわからない。ぬいぐるみたちに戦う力があるのか?」

「そこらへんは、向かわせたものに詳しく聞いてください。私も忙しいもので・・・」

「おい!俺はやるなんて言ってないぞ!」

しかし電話の向こうはとうに無音だった。

そういえば負けた時の話も一切聞いていない。  
説明が少なすぎる割に危険性を煽られただけのよ様な気がする。  
結果、幸高 宙人は若干怯え始めていた。

「ねえ、ヒロト・・・だいじょーぶ？そんな嫌な電話だったの？？」  
ウィリーは机に乗っかって俺を見上げながら言う。

「いや・・・大丈夫だ。なんかお前を戦わせてみないかっていう意味不明な電話だった」

実際、俺にとつてはかなり意味不明な電話だった。

「ふーん、変な電話だったね」

ミニ白熊のウィリーも気難しそうな顔をしている。  
ただ、それも可愛い。

「まっ！いたずら電話だろうから、気にしないでいこうぜ！」  
とりあえずウィリーの前なので強がってみせる。

「うん、そだねヒロト！」

「もう、教室に戻ろう。ウィリー鞆のなかで大人しくしてくれよ？」

「しょうがないな、じゃあ寝てる」

そんなこんなでウィリーに鞆のちょうどいいスペースで寝ててもらい、教室へと戻った。

しかし、その後の授業は全くと言っていいほど耳に入らなかった。  
『マスター』やら『キルト』やら更にはポイント制だなんて言われ  
てすぐに納得出来る奴も居ないはずだ。それに戦わせるだなんて、  
縫いぐるみの趣旨とは真逆すぎる。本来仲良く愛でるものだろう。

いろいろ考えているうちに、もう放課後だった。

「宙人くん、帰らないの？」

内気な幼馴染の當地 由樹が話しかけてくる。

「あ・・・そうだな、帰るわ。由樹は？部活？」

「うん、茶道部だから・・・」

由樹にはとつても似合っている。嫌味ではない、本気でだ。

「そっか、じゃあ俺は帰るな」

万年帰宅部は早々に帰宅する。なにより本当に『マスター』とやら  
が存在するなら、外出は控えたほうが良いのだろう。さしずめ今の  
俺はニューという男曰くカモ候補ナンバー1なのだから。

「あ、宙人くん！あの・・・」

由樹が何か言いかける。しかし、なかなか先を話さない。

そして沈黙・・・。

「どした？なんか可愛いものでも見つけたのか？」

困ったときは可愛い話題だ。

「ごめんね、何でもないので。気を付けて帰ってね」  
内気な女の子に心配されるとは・・・顔に出ていたのだろうか？

そっか、と告げて手を振り教室を後にした。

学校から自宅までは結構距離がある。

気づいたら辺りは夕焼けで暁色に染まっていた。

俺の鞆からはミニ白熊がひょっこりと顔を出している。

「ヒロト！帰ったら何か食べてみたい！」

この子は随分と突飛な発言をする……………。

「おまえさん、食べれんの？」

「……………雰囲気だけでも」

そんな不思議な会話をしている途中で違和感を覚える。

人通りが全くとっていいほどないのだ。

何かによって仕組みられたかのような……………。

そして宙人も会話に夢中で自然と人通りの少ない場所を通ってしまっていた。

なにせ、いつもの帰路はこういった場所を選んでいるからだ。

「やべえ、自分で自分を追い込んでどうする……………」

そして違和感から不安へと変わる。

前方から人影が現れ、人影は間違いなく俺に向かって歩いてきている。

「まさか……な……」  
だが、不安は見事到的中する。

「おまえ、『マスター』だな？」

そうやってきた男は中年でぬいぐるみなど到底持っていると思えない風貌だ。

しかし、その傍らに全長10センチ程のテディベアが突っ立っている。

本当に存在したのだ『マスター』が。

そう認識した瞬間、一気に恐怖が全身を駆け巡る。

この状況は相当危険だ。なんとか戦いは避けねばならない。

「なあ、今回は見逃してくれないか？ なったばかりで訳わかんねーんだ」

これならば情のある人間なら見逃してもらえるはずだ。

「逆に好都合だ、キルポイントを稼ぐのにな」

完全に墓穴を掘ってしまったようだ。ましてや相手に俺の弱さを知らしめるなんて愚かすぎる。

「さあ、出せ！お前の『キルト』を！」  
もう逃げようがない、出してもウィリーが傷つく。ならば俺にとっ  
て出来ることは一つだ。

「嫌だね・・・こいつは大切な親友だ！俺が守る！」

「成程、ではマスターに傷ついてもらう。つまり貴様が死ぬことにな  
るといふ事だぞ？」

俺は負けのルールを知らないがマスターを殺されても負けという  
ことになるらしい。

これは相当ヤバいゲームだ。こんなものに関わってしまうとは・・・  
。。

「ちっ！言ったことは曲げない！だが死ぬつもりもない！」

精一杯の強がりだ。だがまだ『キルト』の力をまだ見ていない俺は  
そこに突っ立っているテイベアは怖く感じるどころか可愛く見え  
ている。

しかし次の瞬間、テイベアは突きのような構えを取り、その場か  
ら俺に向けて物凄い速度で拳を放つ。

その数秒後、『何か』が全身に満遍なく当た  
り、俺は後ろの電柱に叩きつけられる。

「..!」

恐らく真空波だろうか？体全身にズキズキとした痛みが走る。

「初心者といったな？これでわかったらうに、さっさとキルトをだして負けを認める。俺も殺生は好まん」

この中年の男性も良心で言っているに違いない。だがそんなのはゴメンだ。

「い・・・嫌だねっ！死んでも守る」

「強情な奴め、どうなっても知らんぞ？」

またあんなのを食らうのは嫌だが、ウイリーが傷つくのも嫌だ。そんな俺を見かねてかウイリーが出てくる。

「ヒロト！！ボクをだして！！こんなことしたらヒロトが死んじやうよー！」

今にも泣きそうな顔をしているミニ白熊が一匹。

実に可愛いものだ。故に絶対に守り抜く。

「お前は引っ込んでろ！どう見ても俺の方が丈夫だ！」

そんなことをいって鞆に押し込む。

理由にはムリがあるがこう言いはるしかない。

「嫌だ！ヒロト苦しそう！！そんなの見たくない！」

またひょっこり顔をだす、危険だと言ってるのに。

しかしその刹那、このミニ白熊を目掛けて鋭い真空波が放てられたのを察知した。

すんでのところで鞆を抱え背を向ける。

そして鋭い真空波は俺の背中へと突き刺さる。

「……………っ!!」

出血し、あまりの痛みには言葉が詰まる。体勢も膝から崩れ落ちる。

『キルト』の力を目の当たりにし絶望的にもなっていた。

「本当に強情だな？折角キルトを狙ってやったのに……痛いだろう？無理するな」

やはりウィリーを狙っていた、冷酷な男ではない事はわかる……わかるのだが…………。

「うるせえ！誰も頼んでねえ！！余計なことすんな！」  
俺なりの強がりだが、体はもう限界が近い。

ふと手元の鞆に違和感を感じる。

「……………ウィリー!？」

振り返るとその6センチ程しかない体を

めいっばい広げ俺を守っていた。

「やめてよお！もうヒロトは限界なんだ！ボクならここにいるだろ  
!」

すぐにその元へ行こうとする、だが全身の痛み、出血で体が言うことを聞いてくれない。

なんでだよ・・・！せつかく話せたのに！楽しく過ごせるはずだったのに！

こんなんで終わりなのか・・・！？なんで自分の大切な縫いぐるみ一つ守れねえんだ！！

相手のキルトを見る。ウィリーを目掛けて突きの構えを取っていた。

「ちくしょうっ！逃げろ！ウィリーっ！！」  
だがウィリーは動く気配がない。

そしてゆっくりと突きがウィリーへと放たれる。

さながらスローモーション映像のように。

銃弾のような轟音と共に周りに土煙が上がりウィリーに命中。

命中したかのように見えた。

土煙が晴れるとそこにはもう一体の『キルト』がウィリーを庇うように存在した。

一見、ウィリーと同じくらいのパenguin(？)のぬいぐるみ。  
だがどこかぎこちないpenguinを思わせる。

「たす・・・かった・・・？」

泣きそうなくらい安心している自分がいた。

そしてそれと同時にもう一人の人影に気づく。

「情けないマスターですね、貴方も……」  
その人影は近づきながら語る。

「まあ、何も教わってないのでは仕方ありませんね」  
夕日で照らされ人影の正体が判明する。そして驚く。  
長身でスタイル抜群、黒いロングストレートヘアの美女だ。  
そして流暢に語り続ける。

「マスター黒土くろつち 功夫いけあ、貴方も見境なく初心者を襲うとは少し見損  
ないましたよ？」

「俺には時間がない、手段を選んでいる暇などないのでな」

「なるほど、まだ戦つつもりですか？キルト構成委員会直属の私が  
現れても？」

確かに言うだけの程はあるようだ。彼女が現れた途端、男の表情が  
引きつっていた。

「言ったはずだ、時間がないと」  
黒土という男はそう言いながらも、汗をかいている。

「幸高こうたか 宙人ひろて、『マスター』としての戦い方を見せて差し上げまし

よう。『キルト』の扱いも見て勉強してくださいね？」  
そして今、気づいた。彼女が組織から送られた俺のサポーターとい  
うことに……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9066x/>

---

最愛のキルト

2011年10月26日06時28分発行